

英語借用語に見られる子音重複

小林 泰 秀

Gemination in English Loanwords

Yasuhide KOBAYASHI

This paper introduces gemination rules in English loanwords, which insert consonants between short vowels and obstruents. New gemination rules apply to English phonetic forms, but English orthography is also concerned with gemination in some loanwords which have consonant clusters in the spellings.

Loanwords have changed Japanese pronunciation by introducing new sounds from foreign languages, but the syllable system of Japanese has not been changed by the insertion of consonants.

1. は じ め に

外来語の研究は、借用によってどのような規則がその言語に新たに加わったのか、それは本来その言語に存在しているものを反映しているのか、それとも外国語借用によって新しく出来た規則なのか、あるいは両言語を反映する混合規則なのか、そしてそれは普遍的なものかということが課題となる。

外来語の発音がその言語に存在しない場合はより近い発音に代用されるのだが、時代と共に外国語そのものに接する機会が多くなるにつれて、外国語に近い発音がなされるようになる。

- (1) アルハベット → アルファベット, ビルヂング → ビルディング, アッシスタント → アシスタント, チェルニー → ツェルニー, ウエルカム → ウェルカム, ツール → トール, フィルム → フィルム

外来語の使用によって、本来言語が持っている音体系がくずれる場合があると

同時に、その言語の音体系に変わらないものもある。その一つに音節、あるいはモーラ形態がある。日本語の音節は、簡単に言えば -CV- であるので、1音節語である英語の *split* は、*supuritto* 「スプリット」のように4音節になる。これは母音を挿入してCV音節を形成しているためであるが、日本語に借用する際に次の規則によって o, i, u の3つの母音が挿入される。

(2) 母音挿入規則

A.

$$\phi \rightarrow o / \left[\begin{array}{l} +\text{anterior} \\ +\text{coronal} \\ +\text{stop} \\ -\text{nasal} \\ -\text{strident} \end{array} \right] \text{ --- } \left\{ \begin{array}{l} \text{C} \\ \# \end{array} \right\}$$

Aは歯茎破裂音の次に母音 o を挿入する規則である。

〈例〉midnight → middonaito ミッドナイト, dragon → doragon ドラゴン,
part → paato パート

B.

$$\phi \rightarrow i / \left[\begin{array}{l} -\text{anterior} \\ +\text{coronal} \\ +\text{stop} \\ +\text{strident} \end{array} \right] \text{ --- } \left\{ \begin{array}{l} \text{C} \\ \# \end{array} \right\}$$

Bは硬口蓋歯擦音の次に母音 i を挿入する。

〈例〉church → chaachi チャーチ, judge → jajji ジャッジ

$$\phi \rightarrow u / \left[\begin{array}{l} +\text{consonantal} \\ -\text{nasal} \end{array} \right] \text{ --- } \left\{ \begin{array}{l} \text{C} \\ \# \end{array} \right\}$$

AとBの規則の適用できないものは、Cを適用する。Cは鼻子音以外の子音の次に母音 i を挿入する規則であるが、規則AとB以外の環境に於いて適用されるものである。従って、A、BとCの適用順序は背反的である。

〈例〉hops → hoppusu ホップス, pub → pabu パブ, cocktail → kakuteru
カクテル, English → ingurishshu イングリッシュ, jazz → jazu ジャズ,
let's → rettsu レッツ, house → hausu ハウス, life → raifu ラ

イフ, ham → hamu ハム

軟口蓋破裂音 /k/ の次に /u/ が挿入されて [ku] になるのが普通であるが、/k/ の前に前舌母音 /i, e/ が来る時には例外的に [ki] になる場合がある。これは母音調和の現象であろうが、古い発音である。次の (3b) のように [ku] になる語が断然多い。

- (3) a. excite エキサイト, text テキスト, Texas テキサス, deck デッキ,
mixer ミキサー
- b. check チェック, classic クラシック, music ミュージック,
secretary セクレタリー, kick キック, nickname ニックネーム,
mix ミックス, six シックス, telex テレックス, mixing ミックシン
グ, necktie ネクタイ

ink 「インク (インキ)」や *next* 「ネクスト (ネキスト)」には「ク」と「キ」の発音があるのだが、「キ」には発音されなくなって来ている。

外国語の借用によって、両言語に存在しない新しい規則が出来ることがある。それは外国語にない規則なのであるが、外国語らしくする規則である。本稿で取り上げる子音重複もその1つである。英語では次の (4) のような語は早口で話すのでなければ、重子音に発音される。一方日本語の場合、次の例に見られるように、促音があるかないかは重要である。

- (4) a. red dog, white tie, gulf fish, shameless student, brag gangster
- b. かしゃ (貨車) —かっしゃ (滑車), こちよう (誇張) —こっちよう
(骨張), いたい (遺体) —いったい (一体), こき (古稀) —こっき
(国旗), せしゅう (世襲) —せっしゅう (接収)

英語の子音重複は語境界を挟んで2つの語の語尾と語頭の分節音が同じ音に発音されるものであり、日本語の子音重複は1つの語の中にある。従って、日本語の方が子音重複に対する重要性が大きいと言える。外来語の中に子音を挿入する規則は、いかにも外国語らしく響かせる為なのであろうが、それがなぜ外国語らしくなるのだろうか。日本語の音節は基本的には -CV- 型であり、英語のは -CVC- 型である。英語に子音重複 (gemination) は少ないが、重子音 (consonant cluster) は *exchange*, *picnic*, *doctor*, *mister*, *subtract* のように多い。

これらの語は -CVC- 音節が基本になっている。また英語の -CVC- は日本人には促音に聞こえる。例えば net は [neQt] のように促音があるように思われる。従って英語の net に母音を挿入して *neto* にしたのでは -CV-CV- であり英語らしくない。その為 net に子音を挿入して *nett* とし、日本語の音体系に合うように母音を加えて *netto*「ネット」とし、-CVC-CV- と英語らしい音節にしている。Hughes and Trudgill (1979) によると、イギリスの RP やある方言では *batch* [bæʔč], *six* [sɪʔks] のように、子音の前に声門閉鎖音を挿入することがある。これはいかにも外来語の促音化と一致するのであるが、これらが外来語の発音の入力となったとは考えにくい。

しかし次の語には子音挿入はない。

- (5) a. tent → tento テント (*テント), sense → sensu センス, ink → inku インク, jump → janpu ジャンプ, camp → kyanpu キャンプ, pink → pinku ピンク, change → chenji チェンジ
 b. pork → pooku ポーク (*ポーク), beach → biichi ビーチ, sausage → sooseeji ソーセージ, maid → meido メイド, hamburg → hanbaagu ハンバーグ, house → hausu ハウス, bike → baiku バイク, night → naito ナイト, boat → booto ボート, out → auto アウト, speak → spiiku スピーク

(5) のように英語の -CVNC- と -CVVC- の連鎖音に子音挿入が行われないうのは、日本語の音体系に従ったからである。日本語では撥音、長音、二重母音の後では促音は起こらない。擬声語・擬態語や強調語では、次のように長母音の後でも促音が来るが、特殊な現象であり外来語には適用しない。

- (6) ピューツ (と), ザーツ (と), ボーツ (と), シーツ, そーっと, さーっと, やーっと, こーっそり, ふわーっと, びたーっと

以上のように外国語の導入によって日本語に新しい規則が作られたのであるが、実はそれは本来の日本語の音体系に従ったものであって、決して新しいパターンではない。本稿では外来語に見られる子音重複規則とはどのようなものであるかを見ていく。

子音の重複は呼気が口腔内に於いて何らかの阻害を受ける音、つまり阻害音

(obstruent) に見られる現象であり、非鼻音閉鎖音 (nonstop), 破擦音 (affricate), 摩擦音 (fricative) がそれに当たる。外来語の促音化は阻害音の重複であり、子音が挿入されるものである。

(7) 子音挿入規則 1

$$\phi \rightarrow Q / \check{V} ___ [-\text{sonorant}]$$

Qは挿入される子音, つまり促音であり, 次の子音と同一のものになる。

阻害音を大きく継続音性 (continuant) と非継続音性 (noncontinuant) に分けると, 子音挿入規則は次の二つに書ける。

(8) a. 子音挿入規則 2

$$\phi \rightarrow Q / \check{V} ___ [-\text{continuant}]$$

b. 子音挿入規則 3

$$\phi \rightarrow Q / \check{V} ___ \left[\begin{array}{l} -\text{sonorant} \\ +\text{continuant} \end{array} \right]$$

英語が外来語として発音される場合には, ほとんどの場合日本語の音体系になおされるのであるが, 日本語への入力, つまり基底表示になるのは英語の音声単位である単音である場合や音素である場合, あるいは英語のつづり字 (spelling) が基底表示になる場合があるであろう。本稿ではいくつかの例外を除いて, 英語の実際の発音が日本語への入力になっているとする。しかしその際大切なのは, 音声と同時にその語の意味構造も入力されなければならない。

2. 語尾の閉鎖音重複

子音重複の最も一般的な現象は, 英語の語尾が非継続音性 [-continuant] の場合に見られる。非継続音性には閉鎖音と破擦音があるのであるが, 鼻子音の重複はない。鼻子音 /n/ は *planning* → *puranningu* 「プランニング」, *planner* → *purannaa* 「プランナー」, *running* → *ranningu* 「ランニング」, *runner* → *rannaa* 「ランナー」のように二重になっているが, 英語のつづり字がそのまま発音されているのであり, 「プランニング」, 「プランナー」のような促音はない。又, /-ner/, /-ning/ の前に形態素境界 [+] のない *announcer* 「アナウンサー」, *cannon* 「キャノン」等は, /n/ にはならない。促音のない鼻子音は子音重複の

問題とは別のものであり、本稿では扱わない。子音重複の起こる閉鎖音は非鼻音閉鎖音である。以後本稿で使っている閉鎖音 (stop sound) は非鼻音性・非継続音性を指すこととする。

子音重複を作る子音挿入規則は次のようになる。

(9) 閉鎖音挿入規則 1

$\phi \rightarrow Q / \check{V} ___ [-\text{continuant}] \#$

(9) の規則が適用される例を見てみよう。なお母音については本稿の議論の対象ではないので、英語の正書法をそのままにしている。又、括弧内のローマ字は、日本語の母音へ交換したり、母音挿入を適用した後の日本語の発音である。

(10) 語尾が無声破裂音の場合

a. cap kap → kapp (→ kyappu) キャップ

scholarship スカラーシップ, mop モップ, ketchup ケチャップ,
scrap スクラップ, map マップ, leadership リーダーシップ,
develop デベロッパ

b. rocket roket → rokett (→ roketto) ロケット

violet バイオレット, pilot パイロット, trumpet トランペット,
racket ラケット, jacket ジャケット, bucket バケット, spirit スピ
リット, market マーケット

/t/ で終わる語には *jacket* 「ジャケツ」、*bucket* 「バケツ」、*spirit* 「スピリツ」のように「ツ」に発音されるものもあるが古い発音であり、又 *バケツ*—*バケツ*のように意味の違うものもある。*バケツ*が使われていて、後に*バケツ*が新しく別の意味の借用語になったのである。

c. picnic piknik → piknikk (→ pikunikku) ピクニック

technic テクニック, hysteric ヒステリック, black ブラック,
attack アタック, back バック, hammock ハンモック

有声子音の重複は英語では *hot dog*, *Arab buyer*, *big garage* のような語に聞かれるが、日本語には本来存在しなかった。従って古くは *pyramid*, *god* は「ピラミット」、「ゴット」と発音されていた。古い辞典にも「ピラミッド」、「ゴッド」と有声音で記載されているが、実際には無声音に発音されたようである。外来語

の導入によって日本語の発音は変化してきているが、一気に外国語に近い発音になってしまうものではない。次のように /b/ の促音は古い発音であるが、今でもいくつかの語に聞かれるし、/d/ と /g/ にしても有声・無声の両方聞かれるものがある。

(11) 語尾が有声破裂音の場合

- a. cab キャブ, pub パブ, jab ジャブ, knob ノブ, club クラブ, Arab アラブ love ラブ, prefab プレハブ, snob スノブ, mob モブ
- b. pyramid pyramid → pyramidd (→ piramiddo) ピラミッド
head ヘッド, red レッド, spread スプレッド, liquid リキッド,
god ゴッド, bed ベッド (ベット)
- c. drug drug → drugg (→ doraggu) ドラッグ
flag フラッグ, egg エッグ, smog スモッグ, bulldog ブルドッグ (ブルドック), handbag ハンドバッグ (ハンドバック)

zigzag 「ジグザグ」は当然「ジグザッグ」と発音されるはずである。そうならないのは、有声阻害音が4つも続く語に対して、更に有声子音を挿入するのを避けたためであろう。*zigzag* は一つの形態素であるので「ジグザッグ」とはならない。

(12) 語尾が破擦音の場合

- a. catch kach → kacch (→ kyacchi) キャッチ
sandwich サンドイッチ, match マッチ, watch ウォッチ, touch タッチ, scratch スクラッチ, much マッチ
- b. judge juj → jujj (→ jajji) ジャッジ
bridge ブリッジ, college カレッジ, lodge ロッジ, village ビレッジ

語尾の閉鎖音が重複する例を見てきたが、/ps/, /ts/, /ks/ で終わる語にも閉鎖音の重複が起こる。

(13) 閉鎖音挿入規則 2

$\phi \rightarrow Q / \check{V} ___ [-\text{continuant}] s \#$

- (14) paradox paradoks → paradokks (→ paradokkusu) パラドックス
slacks スラックス, electronics エレクトロニクス, box ボックス,

potato chips ポテトチップス, let's レッツ, cats キャッツ

(13) の規則は語境界 [#] の前の子音に適用されるもの、つまり語のレベルでの規則であり、次の例のように /s/ の次に形態素境界 [+] があったり、他の分節音が来る場合には子音の挿入はない。

(15) boxing boks+ing → boksing (→ bokushingu) ボクシング
 boks+ing → *bokks+ing (→ *bokkushingu) *ボックシ
 グ

boxer ボクサー, sexy セクシー, excite エキサイト, exchange エク
 チェンジ, oxyful オキシフル, mixture ミクスチュア, mixing ミクシ
 グ, mixer ミキサー

しかし *Maxwell* は「マックスウェル」と促音になっているが、例外であろう。

(13) の規則は 2 語の間が語境界であれば、次のように子音重複が起こる。

(16) box jacket boks#jaket → bokks#jakett (→ bokkusu jaketto) ボック
 スジャケット

box camera ボックスカメラ, wax cloth ワックスクロス, taxpayer タ
 ックスペイヤー, cat's eye キャッツアイ, mixed yarn ミックスヤーン
 一方閉鎖音は、次に形態素境界 [+] が来ても重複が起こる。従って (9) の
 規則は次のように改められる。

(17) 閉鎖音挿入規則 1 (Revised)

$\phi \rightarrow Q / \check{V} ___ [-\text{continuant}] +$

(18) 閉鎖音 [+] ing の場合

batting bat+ing → batting (→ battingu) バッティング
 shopping ショッピング, developing デベロッピング, knitting ニッティ
 ング, docking ドッキング, shocking ショッキング, cooking クッキング
 グ, pitching ピッチング, heading ヘッディング (ヘディング), jogging
 ジョッキング (ジョギング)

上記の例のように、*heading* や *jogging* は促音になる場合とならない場合がある
 のであるが、新しい語ほど重複はなく、単子音に変わりつつある。有声音にそ
 の傾向が強いのは、日本語にないからであろう。(18) の例外に *marketing* 「マー

ケティング」があるが、これは *marketing* を一つの形態素として見ているか、あるいはモーラ数が多くなるので更に子音を付け加えないかであろう。

(19) 閉鎖音〔+〕er の場合

clipper krip+er → kripper (→ kurippaa) クリッパー
 developer デベロッパー, stopper ストッパー, upper アッパー, flapper
 フラッパー, zipper ジッパー, shutter シャッター, baby sitter ベビーシ
 ャッター, cutter カッター, batter バッター, catcher キャッチャー,
 slugger スラッガー, jogger ジョッガー (ジョガー)

(20) 他の閉鎖音〔+〕形態素の場合

development デベロップメント, attachment アタッチメント, capless
 キャップレス

(21) 閉鎖音〔+〕自由形態素の場合

(17) の規則は (9) の規則をも含むものであるので、語境界のある語にも適
 用される。

touch net touch#net → toucch#nett (→ tacchinetto) タッチネット,
 rucksack ruk+sak → rukk+sakk (→ ryukkusakku) リュックサッ
 ク
 picnic lunch ピクニックランチ, midnight ミッドナイト, nickname ニッ
 クネーム, knockout ノックアウト, patchwork パッチワーク, football
 フットボール, blacklist ブラックリスト, platform プラットホーム,
 bloodstone ブラッドストーン, tag match タッグマッチ, judge paper ジ
 ャッジペーパー

picnic, *technic* が「ピクニック」, 「テックニック」とならないのは、これら
 は一つの語であり、二つの音節の間に形態素境界がない為である。

3. 共鳴音の前の閉鎖音重複

今まで挙げて来た例は、閉鎖音の次に形態素境界、あるいは語境界が来る場合
 であるが、他にどのような分節音があると閉鎖音の重複が起こるか見ていこう。
 共鳴音の前の子音が重複する規則がある。

(22) 閉鎖音挿入規則 3

$$\phi \rightarrow Q / \# (C) \check{V} ___ \left[\begin{array}{l} +\text{consonantal} \\ +\text{sonorant} \end{array} \right] \#$$

前に日本語への入力は英語の音声表示であると述べた。規則 (22) は英語の音素への適用ではなくて、音声へのものである。例えば *apple*, *happen* の基底表示は、/apl/, /hapn/ であって /appel/, /happen/ ではない。

(23) 閉鎖音 - l

a. *apple* ap-l → appl (→ appuru) アップル

couple カップル, *knucle* ナックル, *tacle* タックル, *juggle* ジャッグル (ジャゲル)

double 「ダブル」に促音がないのは (11a) の例にもあるように、/b/ の重複はない。また *miracle* 「ミラクル」が「ミラックル」とならないのは、音節の数が多いためである。人名の *Chaplin* 「チャップリン」は /l/ の次に /in/ が来ているにもかかわらず促音がある。古い発音が残されているためであり例外として扱う。

次のように歯茎閉鎖音 /t, d/ は /l/ の前では重複しない。

b. *little* リトル, *battle* バトル, *bottle* ボトル, *middle* ミドル

(22) の規則は閉鎖音の直後に共鳴音が来る場合であり、母音がある場合には適用されない。

c. *chapel* チャペル, *hotel* ホテル, *appeal* アピール

しかし、*nickel* 「ニッケル」、*baccal* 「バックカル」のように母音 coming しているにもかかわらず /k/ の重複が起こるのは、後で述べるが /k/ は他の閉鎖音に比べて促音になり易いのである。

(24) 閉鎖音 - r

閉鎖音の次に /r/ が来る例は少ない。

a. *litre* lit-r → littr (→ rittoru) リットル

patron 「パトロン」や *patrol* 「パトロール」は閉鎖音の次に /r/ が来ているが促音がないのは、/r/ の次に他の分節音があるからである。閉鎖音の次に母音がある場合には、閉鎖音と母音の間に形態素境界がないかぎり、(22) の規則に

従い子音重複は起こらない。

- b. butter バター, letter レター, better ベター, baton バトン,
pattern パターン, return リターン, supper サパー, pepper ペパー
(ペッパー)

appeal や *pepper* に両方の発音があるのは、促音の方が古いのは言うまでもない。非常に古い辞典に *supper* 「サツパア」、*support* 「サツポート」、*letter* 「レットテル」というのがある。昭和初期の外来語には英語のスプリングが /VCCV/ であれば促音になるという規則があり、それは今でも存在している。外来語に古い発音が残っている以上、古い規則も存在し、新しい外来語にも影響を及ぼすのは当然のことである。本稿で取り上げるのは主として現代の発音から見た規則であるが、後でも度々触れるが、それだけでは説明出来ない面もあるのである。

(25) 閉鎖音-n

- a. happen hap-n → happn (→ happun) ハップン
cotton kot-n → kottn (→ kotton) コットン
kitchen kich-n → kicchn (→ kicchin) キッチン

但し、/+VN#/ の語には規則 (22) が適用されない為、次のように閉鎖音の重複は起こらない。

- b. Japan ジャパン, mutton マトン, baton バトン, button ボタン,
chicken チキン, atom アトム, bottom ボトム

cotton 「コットン」と *mutton* 「マトン」の違いは基底表示の違いにあるのではなくて、「コットン」は古い発音であり「マトン」は新しい発音だ、というのが正しいであろう。しかし両語の発音の違いを現代の規則から見ると、基底表示が違ふということになる。又 *chicken* 「チキン」の基底表示は /chikin/ である。もし /chikn/ であるならば、母音 /u/ が挿入されて「チックン」と発音されるはずである。

(26) 閉鎖音-V

英語の語尾の /i/ は緊張母音に発音されるが、日本語では長母音になる。閉鎖音の次に語尾の母音の来る例 (閉鎖音V#) を見てみよう。

- a. happy ハッピー

- b. rocky ロッキー, lucky ラッキー, Rockie ロッキー, Mickey ミッキー, picky ピッキー, groggy グロッキー
- c. copy コピー, puppy パピー, kitty キティー, city シティー, charity チャリティー, ruby ルビー, body ボディー

上の例を見ると、/i/ の前の閉鎖音重複は、/k/ を除くと *happy* 「ハッピー」だけである。しかも「ハッピー」は非常に古く日本に入ってきたものである。古くからある規則として英語のスペリングが /VCCV/ であれば促音化する語があると前にも述べたが、「ハッピー」もそれに入るだろう。従って、(26) のように閉鎖音の次に母音の来ている語には、規則 (22) は適用しないので、別の規則によって促音化が起こっているとする。スペリングによって促音が発せられる例は次のようなものがあり、必ずしも古い外来語だけではない。

- d. appeal アppeール (アピール), battery バッテリー, motto モットー, otter オッター, ottoman オットマン, mitten ミッテン
- c.f. photo 「フォト」, mocha 「モカ」

もちろん英語のスペリングが /VCCV/ であっても、次のように促音にならないものも多い。

- e. appetizer アペタイザー, appoint アポイント, attest アテスト

(26b) の語に促音が聞かれながら、(26c) にはないのは、/k/ には他の閉鎖音には適用されない規則があるからである。日本語での [kk] の発音は英語の音声からだけでは予想できない場合がある。例えば *echo* 「エコー」と *Decca* 「デッカ」、*equal* 「イコール」と *lacquer* 「ラッカー」などは、英語の発音では /k/ は一つの分節音であって両者に違いがない。/VCCV/ を子音重複に発音するのは古い外来語の規則だと述べたが、軟口蓋破裂音 /k/ の重複には英語のスペリングが多いに関係している。/ck/, /cc/, /cq/ は次に母音が来る場合には [kk] と発音される。軟口蓋破裂音の促音化規則は次のようになる。

(27) 閉鎖音挿入規則 4

c → Q / ___ k V...

- a. rocky ロッキー, lucky ラッキー, Mickey ミッキー, hockey ホッケー, Dacca ダッカ

- b. *succer* サッカー, *lacquer* ラッカー
- c. *baccal* バッカル, *nickel* ニッケル,
- d. *saccharin* サッカリン, *package* パッケージ, *packing* パッキング,
Thacceray サッカレー, *Mckinley* マッキンリー

(27) の (a) は /k-V/, (b) は /k-er/, (c) は /k-VI/, (d) は /k-V.../ の語である。*package*, *packing* は /pack+age/, /pack+ing/ のように形態素境界があるとも考えられようが、これらは1語であるという認識にたつと、規則 (27) が適用されていることになる。また *picket* 「ピケット」が「ピクケット」とならないのは、/pick+et/ のように二つの形態素から成り立っていないからである。一方 *pickup* は /pick+up/ であるので、「ピックアップ」と発音されている。

(27) が適用されない語は、スペリングが {ck, cc, cq} でないもの、スペリングは {cc} であっても [ks] と発音されるもの、/k/ の次に子音が来ているものである。次のようなものがそうである。

- (28) a. *document* ドキュメント, *mocha* モカ, *echo* エコー, *nicotin* ニコチン, *record* レコード, *equal* イコール,
- b. *accent* アクセント, *access* アクセス
- c. *cocktail* カクテル, *pickles* ピクルス, *technician* テクニシャン,
secretary セクレタリー, *bacteria* バクテリア, *action* アクション

固有名詞は例外的に英語の音節が /..VC-CV../ であっても、前の /C-/ の重複が起こる場合が多い。しかし後ろの /-C/ が有声音の場合にはない。

- (29) a. *Rockfeller* ロックフェラー, *Chaplin* チャップリン, *Thatcher* サッチャー
- b. *MacDonald* マクドナルド, *Macbeth* マクベス

4. 継続音の重複

出来るだけ英語の音声を入力として外来語の子音重複規則を作り出したいのだが、正書法も大きく関与していることが分かった。次に継続音の重複規則を見よう。

子音の重複は障害音に見られる現象であり、非鼻音閉鎖音と破擦音の重複につ

いてはすでに見てきたように、有声音と無声音の両方が見られたが、摩擦音の重複は無声音にしか見られない。まず歯茎摩擦音の促音化規則を見てみよう。

(30) 摩擦音挿入規則 1

$$\phi \rightarrow Q / \check{V} _ s [+sonorant]_i^j (C) \#$$

(30)は英語の音声を入力とする規則であり、/s/ の次に一つ以上の共鳴音(母音, r, l, n)が来る場合に適用されるのであるが、/s/ の次に二つの共鳴音が続く場合は、母音の次に /r, l, n/ が来る。

(31) s が語尾の場合

/s/ が語尾に来る場合には、規則 (30) に従い子音重複は起こらない。

dress ドレス, pass パス, process プロセス, mattress マットレス, focus フォーカス, bas バス, address アドレス, kiss キス (キス)

語尾の /s/ が促音になるのは古い発音であり、昭和初期の辞典「大言海」には address「アドレス」というのもある。

(32) s - 母音

/s/ の次に母音がある場合には子音重複が起こる。(a) は /V-sonorant/, (b) は /V-sonorant-C/ の例である。

- a. dresser ドレッサー, professor プロフェッサー, compressor コンプレッサー, russel ラッセル, essay エッセイ, dessin (仏) デッサン, croissant (仏) クロワッサン
- b. message メッセージ, passive パッシブ, naissance ルネッサンス, passing パッシング, crossing クロッシング, dressing ドレッシング, essence エッセンス

(30) は語境界内での規則であるので, *dress+er*「ドレッサー」のように間に形態素境界があっても差し支えない。

(33) s - 共鳴音

/s/ の次に共鳴音 /l, n/ が来る場合も子音重複が起こる。

hustle hus-l → hussl (→ hussuru) ハッスル

whistle ホイッスル, castle キャッスル, listen リッスン, lesson レッスン

規則 (30) の適用されない例を次に挙げよう。

- (34) a. *assistant* アシスタント, *association* アソシエーション, *aside* アサイド, *assignment* アサイメント, *fascist* ファシスト, *fascism* ファシズム, *pessimist* ペシミスト, *pessimism* ペシミズム, *possibility* ポシビリティー
- b. *crossfire* クロスファイア, *passport* パスポート, *pastel* パステル, *escape* エスケープ, *aspirin* アスピリン, *hystera* ヒステリー
- c. *officer* オフィサー, *glycerine* グリセリン, *reception* レセプション
- d. *jazz* ジャズ, *puzzle* パズル, *buzzer* ブザー

(34 a) は /s/ の次が /V-sonorant-C/ の分節音になっておらず, (b) は /s/ の次が子音であり, (d) は有声音である。(34 c) の語に促音が起こらないのは, 英語のスペリングが {c} であるからと言えよう。*glycerine* と *reception* はその発音から規則 (30) に適用されないが, *officer* はスペリングが {c} でないと, 音声的には適用されるはずである。古い辞典には *assistant* 「アツシスタント」, *association* 「アツソシエーション」, *fascist* 「ファツシスト」, *fascism* 「ファツシズム」という発音もある。このことから古くは, /VssV/, /VscV/ のスペリングを促音に発音する規則が存在していたと言える。

次に英語で [ʃ] と発音される硬口蓋摩擦音の重複について見ていこう。

(35) 摩擦音挿入規則 2

$\phi \rightarrow Q / \check{V} ___ \}$

- (36) a. *rush* ラッシュ, *wash* ウォッシュ, *flash* フラッシュ, *dish* ディッシュ, *finish* フィニッシュ, *publish* パブリッシュ, *British* ブリティッシュ, *dash* ダッシュ, *crash* クラッシュ
- b. *tissue* ティッシュ, *fascio* ファッショ, *crusher* クラッシャー, *washer* ウォッシャー, *smashing* スマッシング, *mission* ミッション, *passion* パッション, *discussion* ディスカッション, *permission* パーミッション, *fashion* ファッション, *cushion* クッション, *fashionable* ファッションナブル, *professional* プロフェッショナル
- c. *mushroom* マッシュルーム, *mashed potato* マッシュトポテト,

washteria ウオッシュテリア, refreshment レフレッシュメント,
punishment パニッシュメント

(36) の (a) は /ʃ/ が語尾の場合, (b) は母音の前, (c) は子音の前の例である。marsh-mallow 「マシュマロ」が「マッシュマロ」とならないのは、英語の発音が長母音の為であり、「マーシュマロ」とでも発音されるはずである。

英語の /stʃ/ が [ʃʃ] に発音されている。

(37) question クエッション (クエスチョン), suggestion サジェッション (サジェスチョン),

(37) の括弧内の発音が示すように、英語の発音 /stʃ/ を入力とする新しい発音には子音重複は起こらない。

硬口蓋摩擦音の促音化が起こらない例を見ていこう。

(38) a. measure メジャー, vision ビジョン

b. mansion マンション, tension テンション, Marshall マーシャル,

c. technician テクニシャン, position ポジション, edition エディション,
politician ポリティシャン, musician ミュージシャン, official
オフィシャル, machine マシーン

(38) の (a) は硬口蓋摩擦音が有声音の場合であり, (b) は /ʃʃ/ の前が短母音でない場合である。(c) の語に促音がないのは、英語のスペリングが {s} でないからである。促音があるのは英語のスペリングが {sh, s, ss, st, sc} のものであり, {c, t, ch} は /ʃʃ/ にならない。このことから子音重複は単に正書法によるものであり、英語の発音とは何の関係もないということになるかもしれない。しかし我々は外来語を話す際に頭の中にスペリングを描いているだろうか。

(35) の規則を無意識に習得した者が, (38 c) の語へも適用することは充分ありえるし, 又, あって当然のことである。外来語の発音は, 時代と共にその基底表示がつづり字から音声へと変わりつつあるのは確かである。

最後に唇歯摩擦音 /f/ の子音重複を見ていこう。/ff/ は次に共鳴音が一つ, あるいは二つ来る時に起こる。

(39) 摩擦音挿入規則 3

$\phi \rightarrow Q / \check{V} ___ f [+sonorant] \#$

規則 (39) は次のような語に適用される。

- (40) a. *baffy* バッフィー, *taffy* タッフィー, *Sappho* サッフォー
 b. *baffle* バッフル, *waffle* ワッフル, *shuffle* シャッフル
 c. *offer* オフファー (オファー), *buffer* バッファー, *Eiffel* (仏) エッフェル

baffalo 「バッファロー」は規則 (39) が適用されないのであるが、促音がある。非常に古い発音であり、新しい語である野球チーム名の *Buffaloes* 「バッファローズ」には促音がない。

/f/ が語尾に来ている場合には次のように促音になるものとならないものがある。

- (41) *staff* スタッフ, *stuff* スタッフ, *puff* パフ (パッフ), *off* オフ, *sheriff* シェリフ,

次の語は規則 (39) が適用されないため、子音重複は起こらない。

- (42) a. *cuffs* カフス, *transfer* トランスファー, *offside* オフサイド, *ruffler* ラフラー
 b. *effect* エフェクト, *offense* オフェンス, *office* オフィス, *official* オフィシャル, *sapphire* サファイア, *refine* リファイン, *reform* リフォーム, *reference* レファレンス

唇歯摩擦音の重複は英語のスペリングが {ff, pph} のものに限り、次の語には促音化は起らない。

- (43) *tough* タフ, *rough* ラフ, *photography* フォトグラフィー, *photographer* フォトグラファー

5. おわりに

英語借用語の子音重複規則を英語のつづり字よりもまず音声を基底表示として考えて見るのが、本稿の目的であった。しかし英語の発音だけからは推し量れない面もあり、それは古くから正書法という視覚的な要素が子音重複を左右してきたからである。

「ピューン」、「キャーツ」のような語もあることから、日本語の音節は / (C)

(y)V(V)(C)/ と書けるが、日本語の一般的な音節は / (C)(y)V(V)/, / (C)(y)V N/, / (C)(y)V Q/ であり、一つにまとめると / (C)(y)V($\begin{matrix} V \\ N \\ Q \end{matrix}$) / となる。促音が短母音の次にのみ現れ、二重母音や鼻子音の次に現れないのは、促音は母音や鼻子音と同じくそれだけで一つのモーラに数えられるからである。子音重複の制限は日本語固有の音節形態によっている。

最後に、現在の外来語の発音は外国語の発音とつづり字の両面からなされているが、今まで変化して来たように、これからも時代と共に変化して行くであろう。それは現在外来語にまだない子音の重複が将来現れることも意味する。そして又、外国語の発音の影響によって、日本語の音体系が変化し、日本語に新しい規則が作られることになる。外国語の導入は常に日本語を変えていく。それは同時に日本語を豊かにしていくことにもなる。またそうなるべきものだけが残っていくはずである。

(1991. 12. 10)

参 考 文 献

- 荒川惣兵衛編註. 1931. 『日本語となった英語』東京：研究社
- あらかわそおべえ. 1987. 『外来語辞典』第2版 東京：角川書店
- Chomsky, N. and M. Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*, Harper and Row, New York.
- Hughes, A. and P. Trudgill. 1979. *English Accents and Dialects*, Edward Arnold Ltd., London (鳥居次好・渡辺時夫訳『イギリス英語のアクセントと方言』研究社1984)
- 石綿敏雄. 1990. 『基本外来語辞典』東京：東京堂出版
- 新村出編. 1983. 『広辞苑』第3版 東京：岩波書店
- 大槻文彦. 1932. 『大言海』東京：富山房
- 三省堂編集所編. 1990. 『コンサイス外来語辞典』第4版 東京：三省堂
- 吉沢典男・石綿敏雄. 1990. 『外来語の語源』第8版 東京：角川書店